

2年間と沈黙

第5期生 千葉 貴宏

小野ゼミに入会して2年間。結論から言うと、この2年で私は驚くほど無口になりました。

活動内容が豊富で、指導教授も熱心でいらっしゃるようなゼミに所属することの意義は、おそらく一般的には「とことんやりきるチカラ」だとか「一生モノの友情」といったことになるのでしょうか。しかし、私がこの2年を通して行ってきた活動はシンプルに「前の世代から後につづく世代へのリレーの一部」に他なりません。そして、その「リレーの一部」になるためには、語らずにいること、無口でいることが何よりも重要だと私は信じています。私がこの「小野ゼミでの2年間を振り返って」というエッセイを執筆する第1の動因も、一見無価値だと思われそうな、語らずにいることの重要性を少しでも次の世代に理解してもらいたいという私自身の切なる願いにあります。

フィリップ・コトラー。この言葉から全ては始まりました。膨大なページ数の基礎文献を要約するというタスクは、大学受験の勉強量をも凌ぐ、今まで経験したことのない自分との戦いの日々を私たちに課しました。その作業は、たとえ仲間と一緒にいるときであっても、常に沈黙とともにあり、自分ひとりの集中の世界に住み、精神を研ぎ澄ます必要があります。弱さを押し込め、パソコンのなかに自分ではない別の人の思考を端的に形作ることの難しさは、まるで禅の修業のようでした。

グループワーク。小野ゼミの活動の代名詞と言ってもいいかもしれません。はじめはただがむしゃらに、関係あるのかわからない情報を集め、触ったことのない学術文献を熟読し、出口の見えない議論を重ねていました。しかし次第に、グループワークの本質は、ただ黙って耳をすます、ということだと気付きました。仲間が行ってきてくれたタスクの真の意味を理解するためには、自分が話してはいけません。先入観を捨て、あらゆる可能性を考慮に入れてから仲間の意見を理解することで、多角的な視点から問題を見つめなおすことができます。当然意見の発信も怠りませんが、議論においてもはじまりは沈黙なのです。

小野先生。内に秘めた情熱ときれいな文章力を持ち、いつもこうおっしゃいます——私は何もしていません、と。先生は常に、問題の可能性を指摘して下さり、私たち自身がその問題の発現に気付くのをじっと待っていらっしゃいます。直接教えようと思えばいくらでも教えられるところを、私たち自身が気付くまで待ってくださいます。その沈黙から生まれる知こそが真の学習であり、真の教育であると私は気付かせていただきました。

自分のまわりにいる人の価値を受容すること、そして、自分の想いを相手に気付いてもらうこと。単純に思える一方で、これほど困難なことはそう多くはありません。多くを語らず、自分を0^{ゼロ}にすることによってのみ、世界に耳をすませることができるはずです。陳腐な表現になってしまいましたが、2年間の小野ゼミでの勉学の時間は、私に改めてこの基本的な事実を気付かせてくれました。私のこれからの人生は、この2年間の沈黙の日々なくしては形成され得ないと信じています。